

一瞬、ふふふ…… 二瞬めに、むむむ……



カット ● 竹口義之

東江一紀

春先からがしがし働いてきた報いでしょうか。そろそろひと息、いや半息入れたいなつてときに、三冊の本のグラがいつぺんに出てきて、否応なく校正・あとがき地獄に突入してしまった。

普通なら、本作りのいよいよ最終段階ということで、結構心はずむ作業なんですけどね。

三冊分のグラに連続して手を入れ、三冊分のあとがきを連続して書くとなると、さすがにちと苦しい。おまけに、べつの三冊を並行して翻訳中で、ついでは、もう一冊リーダーで、計七冊のストーリーや人物が頭のなかをぐるぐると駆けめぐり、第二次大戦後のウィーンに金門橋と九竜城と五番街が出現し

て、エア・ジョーダンを履いたネルソン・マシラが毛沢東と獄中革命の相談をしているありさまなのだ。

まあ、校正は、まだいい。自分が訳した作品だとはいえ、基本的に本を「読む」作業だものね。数か月前の自分の奮闘の跡を、覚めた読者の目で眺めて、「ふふふ、あたしってば」と、かたわらのコーヒーカーップに向かって顔を赤らめたりする楽しみもある（べつに、赤らめなくてもいいんだけど）。

問題は、あとがきです。手間がかかるんだ、これが。なにせ、あとがきには原文がない。そりゃそうだよな、「訳者あとがき」なんだから。版元によっては「解説」ともいうが、やることは同じ。訳者が作品について、あるいは作者について、ぐたぐたと、あることないこと（あることばかりじゃ、ページが稼げない）、知ってること知らないこと（知ってることばかりじゃ、箔が付かない）、思ってること思っていないこと（思ってることばかりじゃ、商売にならない）書き連ねるという趣向ですね。

ふだん、原文をにらみながら、辞書を引きまくりながら、うんうんうんうんって、やっとこさ日本語をひねり出すという仕事を、明けても暮れてもやっている身なので、原文なしに日本語だけ綴れと言われると、あたふたして

しまう。情けない話ではありません。

それでも、わたし、時間の余裕さえあれば、その「あたふた」を楽しめる口だ。ときどきは、脳内のいつもとちがう回路を使ったほうが、老化防止のためにもいいような気がする。

「使い捨て回路」はいけません。

ま、とにかく、あとがきを書くためには、通常と違うモードにならなくちゃいけないわけで、そのモードの持続時間ちゅうものが、スペシウム光線みたいに限られてるのね。

ある詩人が、昔、「朝ごはんを食べる前の、意識の剝離状態みたいなものをそっくり言葉にできれば、そうとうおもしろい詩が書けそうだが、ごはんを食べてしまうと、胃が腰を据え、あたりが見えだして、人間は「正気」のくさりにつながってしまう」というようなことを言っていて、わたし、ふむむとうめいた覚えがある。

いや、つまりね、翻訳という作業は、どう考えても朝ごはんのあとにやるものだと思う。胃袋を落ち着けたうえで、じつくり、ねっとり、むっつり、こつこつ、じめじめ取り組むべき質のものである、と。たとえ原文が狂気の筆で書かれていたとしても、それを日本語に写し取る工程は、断じて「正気」でなされるべきでありましょう。

翻訳者というのは、そういう「正気」のく

さりにつながれた、じつに小心な、みみっちい、面目ない職業表現者であって、表現界のずっと風下のほうに、ちまちまと棲息している種族なのだった。

なんだか論旨がねじれてきたけど、要するに、あとがきを書くのは、翻訳者にとって、非日常的な、一種の「お祭り」行為だということと言いたかった（ような気がする）。

もうひとつ問題なのは、いえ、問題と言っても、べつに取り立てて書くほどの大問題じゃなくて、ぜひとも皆様にお聞かせしたいほどの中間でもなくて、実にまあ枝葉末節の、気にするのもばかばかしいようなフオーク、じゃなくてナイフ、じゃなくて瑣事なので、読者諸兄にはすっと読み飛ばしていただきたいのだが、それはつまり、このあとがきを書くという仕事です、ね、なんと**ただ働**きだっちゅうことだ。

あつ、つい倍角文字のキーを押してしまつて、申し訳ない。いえ、いえ、わたしはなにも、現行の制度に不満を申し述べようとか、業界の慣習にたてつこうとか、そんな大それた意図をもって発言しているのではなく、風下に住まう無力な民のひとりとしてですね、職務遂行上のごくささやかな疑問点を、声を出して、ぼろっと洩らしちゃっただけで、意見とか提言とか、そういう筋の通ったもの

ですらなく、ただ単純に、訳者あとがきは何枚書いたって、**原稿料を一銭ももらえない**という、あつ、また倍角になってしまったけど、べつに高らかに訴えようなどという底意があるわけじゃなくて、客観的な事実をそうっと、控え目につぶやいていると、まあそういうことなんです（どういうことだ？）。

わたし、前に一度、校了間際に病気で倒れた先輩訳者の代わりに、あとがきだけ書かされたことがある。そのときもらった原稿料が、思ったより高額で、一瞬ふふふと頬がゆるんだが、二瞬めには、むむむと股間に、じゃない、眉間にしわが寄った。

他人の訳書にあとがきを書くと、原稿料がもらえる。自分の訳書にだつて、他人があとがきを書くと、その人に原稿料が支払われる。自分の訳書に自分で書いた場合だけ、なんにももらえない。その訳書の印税のなかに、あとがきの原稿料が吸い込まれてしまうのだ。ふっしぎ。

いえ、いえ、労力に見合う報酬をよこせと言ってるんじゃないの（くれるんだつたら、固辞はしないけど）。訳者あとがきにはね、作者と作品と読者に対する翻訳者の**無償**の**愛**が込められているのだということ、を、ちよつとだけわかってほしいのであった。